

**第5回**  
**尾張藩青松葉事件直後の  
伊藤圭介**

かたり： 山内 一信  
(名古屋大学大学院医学系研究科  
医療管理情報学)

平成18年9月8日(金)午後6:00～7:30  
中央図書館5階多目的室

**伊藤圭介**

(1803 - 1901)

- 幕末・明治の植物学者
- 尾張藩の人
- 東大教授、最初の理学博士
- シーボルトに師事
- リンネの植物分類法を抄訳し、『泰西本草名疏』を刊行
- 『日本産物誌』、『日本植物図説』



## 青松葉事件

- 青松葉事件は幕末期尾張藩で起きた佐幕派一掃事件とされていますが不明な点が多くあります。その佐幕派には洋学派が多いようです。尾張藩の洋学を引っ張ってきた伊藤圭介にとってはおだやかならぬ事件と思われるが、事件翌日から圭介は医官として京都の警護に出かけます。圭介日記には事件のことは何も記載がありませんが、その心中を考えてみます。

## 金鉄党 VS 鞆党

- 金鉄党
  - 在京の士、勤王派で固められていた。その一派をいう
  - 十四代慶勝 - 成瀬隼人正 (はやとのかみ) 正肥 (まさみつ) (3万5千石) - 田宮如雲ら
- 鞆 (ふいご) 党
  - 「金鉄をも銷 (と) かすということを意味
  - 「鞆党」は、渡辺新左衛門 (2千5百石年寄列) を首領とする党派
  - 十五代茂徳 (もちなが) (慶勝の弟) - 竹腰兵部少輔 (ヒョウノショウユ) 正アト (マサアト) (御付家老3万石) - 新左衛門

## 処刑された藩士(14名)

- 渡 辺 新左衛門 2,500石(49)
- 榊 原 勘解由 1,500石(59)
- 石 川 内蔵允 1,000石(42)
- 冢 田 愨四郎 200俵(61)
- 松 原 新 七 200俵(41)
- 安 井 長十郎 250俵(52)
- 林 紋三郎 300石(40)
- 寺 尾 竹四郎 150石(54)
- 馬 場 市右衛門 200石(26)
- 横 井 孫右衛門 1,500石(44)
- 沢 井 小左衛門 800石(44)
- 武 野 新左衛門 800石(77)
- 成 瀬 加兵衛 800石(62)
- 横 井 右 近 4,000石(51)

## 尾張藩幕末期の経過(1)

- 1827(文政10): 圭介自宅修養堂で本草会、その後シーボルト師事、  
『泰西本草名疏』刊行
- 1832(天保3): 尾張医学館で薬品会
- 1848(嘉永元): 上田仲敏蘭学塾(洋学館)の許可を得る
- 1849(嘉永2): 慶勝14代藩主に  
この間、知多の異国船防衛、砲術訓練など、植松茂岳明倫堂教授次座、  
富百社博物会(薬品会)
- 1858(安政5): 富百社博物会(薬品会)
- 1858(安政5)  
- 7月: 慶勝14代藩主、日米通商条約反対、隠居、謹慎、  
国学派植松ら隠居謹慎、田宮篤輝謹慎、
- 1858(安政5)  
- 7月: 茂徳15代藩主、幕府よりの開港・西洋式軍制改革路線
- 1859(安政6): 滝川又左衛門・千賀 銃陣総裁、上田銃陣師範役  
- 6月: 圭介、七人扶持寄合医師  
- 12月: 圭介洋学所総裁心得、藩の公的学問所に
- 1860(万延元): 桜田門外の変、慶勝復活、従二位権大納言
- 1860(文久元): 圭介、蕃書調所出役
- 1862: 慶勝復権、成瀬、西洋砲廃止、国学復活(明倫堂)、  
竹腰幽閉、田宮赦免
- 1863(文久3): 上田仲敏死去(5)、元千代16代藩主、田宮明倫堂総裁、  
圭介蕃書調所退出

## 尾張藩幕末期の経過(2)

- 1864(元治元): 慶勝第1次征長総督、圭介奥医師見習、洋学所を上田邸から自宅へ、千村十郎右衛門を洋学所総裁(嘆願)
- 1865(慶応元): 小笠原、横井、佐枝ら圭介に千村五郎を洋学所教授に(打診 不可)
- 1866(慶応2)
  - 正月: 小笠原、横井、佐枝ら洋学所講義を明倫堂で行うべき(洋学を公学にしたい?) (阿部八助に打診 不可)
  - 12月: 茂徳(玄同)一橋家を継ぐ、尾張藩佐幕派の完全孤立
- 1867(慶応3): 大政奉還、慶勝京、王政復古、慶勝議定、丹羽賢、田中不二磨田宮如雲参与、
  - 10月: 洋学所消滅(洋学所の蔵書を藩主に提出)
- 1868(慶応4)
  - 1月3日: 鳥羽伏見、
  - 1月12日: 成瀬正肥、田宮如雲ら岩倉具視に佐幕派の実状訴える
  - 1月20日: 渡辺、榊原、石川斬首
  - 1月20日: 藩主義宜名古屋出発
- 1869(明治2): 圭介自宅政事堂で洋学を講じる
- 1870(明治3): 圭介、石井隆庵、中島三伯と連署して、西洋医学講習所開設を藩に請願
  - 閏10月: 圭介、石井隆庵とともに、種痘所頭取および病院開業掛を命じられる
  - 10月: 明治政府より大学出仕を命じられる
- 1871(明治4): 文部省出仕

## 圭介は総裁に千村十郎右衛門を挙げる

1864年(元治元)資料7(P98)

- 洋学所惣裁之儀右御取建己来上田帯刀私兩人江被仰付相勤罷在申候処昨亥年帯刀病死後者私壹人二而相勤居申候得共先達而茂御達申上置候通千村平右衛門方隠居同姓十郎右衛門方儀洋学執心追々熟練相成申候付帯刀跡惣裁役心得之儀被仰渡被下候様仕度此度申上候

十一月

寄合御医師

伊藤圭介

## 千村平右衛門の総裁就任、千村五郎の招聘の失敗

- 圭介は総裁以外にも教授陣の確保として洋学所の改革を進めていったが、元治元年12月26日付の小笠原三郎右衛門、横井孫右衛門、佐枝新十郎の3人から圭介に宛てた書簡で「千村平右衛門叔父同姓五郎儀、洋学有志之輩修業筋御自分申合引請取立候様申渡、此表江可罷登旨をも申渡之儀江戸表被申越候可被得其意候、仍申入候」とあり、「洋学所」発足の段階から候補にあがった千村五郎を教授陣に引き入れようとした。しかしながら慶応元年3月28日付の小笠原、佐枝両名よりの圭介宛書簡では「千村平右衛門叔父同姓五郎儀洋学有志之輩修業筋御自分、、、」

『伊藤圭介の研究』(土井康弘著)P197より

圭介宅に移った洋学所を明倫堂(公学)に移そうとした考え

## 於明倫堂洋学習練御沙汰之事

- 千村平右衛門叔父同姓五郎儀、洋学有志之輩修行筋伊藤圭介申合引請取立候様年寄衆被仰聞申渡候付而八右習練所之儀於明倫堂指支無之哉席共吟味勘弁之趣一兩日中二可申達候

正月廿四日

小笠原三右衛門  
横井孫右衛門  
佐枝新十郎

阿部八助様

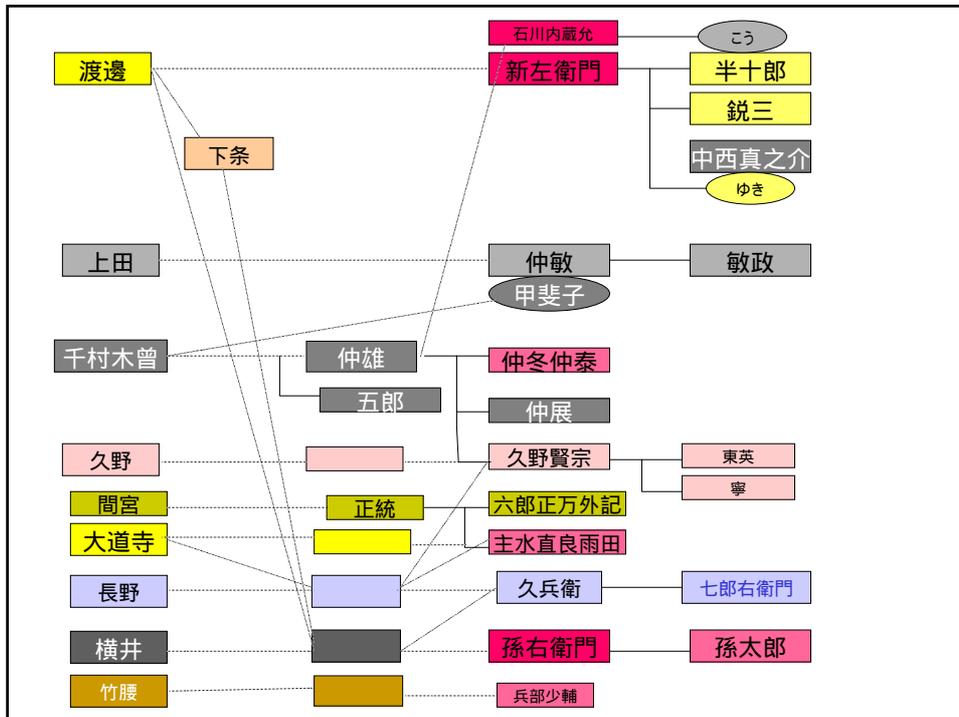
- 猶々本文洋学修行生当時二十人程日々出席之輩拾人程ツツニ有之候此段も為心得申談候以上
- これに対して明倫堂督学阿部八助は鎖国精神に反するとしてあっさり退ける

『伊藤圭介の研究』(土井康弘著)より

慶応2年(資料9)p100

## 尾張藩幕末期の経過(3) 慶応4年

- 1月3日: 烏羽・伏見の戦い
- 1月7日: 徳川慶喜討伐大号令
- 2月15日: 東征伐軍出発
- 1月24日: 犬山、今尾藩独立、丹羽賢ら40名、勤皇誘引掛として近隣に派遣、明倫堂内に待賓館を設ける
- 2月18日: 東海道先鋒 富永孫太夫隊800名出陣
- 2月21日: 有栖川宮大総督名古屋西別院に
- 3月13日: 五箇条の御誓文
- 4月11日: 討幕軍江戸城に、江戸無血開城
- 4月25日: 慶勝、国内姦徒処分、隣境帰順の報告に京へ、途中甲信の賊徒征討命令、名古屋に帰る(26 - 29日)
- 4月29日: 千賀信立先鋒隊1,500名出陣
- 閏4月9日: 慶勝美濃太田出陣(6月26日凱旋)、成瀬・田宮隊甲信へ
- 7月17日: 東京に
- 8月4日: 藩主義宜帰国へ、このころ千賀隊は長岡進撃
- 8月14日: 千賀隊会津へ出発、9月16日会津に
- 8月27日: 明治天皇即位、9月8日明治に
- 10月28日: 千賀隊ら名古屋に凱旋(戦死者26名)
- 12月23,24日: 慶勝、義宜両君出席のもとで招魂祭執り行われる、祝詞:植松茂岳、尾張藩国学派列席



## 慶応4年圭介日記

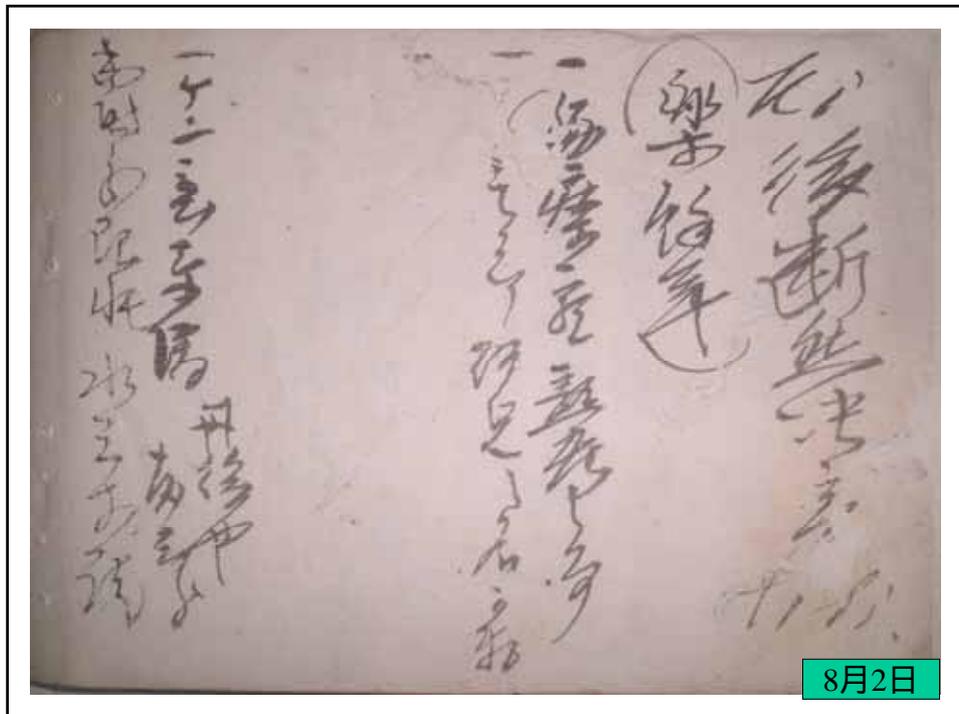
- 1月21日: 登城、出立
- 1月22日: 京に上る途中、宿の小児に舎電法謨(セイデンハム)を処方
- 2月8日: 御用人より京都・薩摩藩邸でウィリアム・ウイリスが北越戦争の戦傷者の手術を行うのを見学するべきとの意見をもらっている
- 2月8日: 謙児に洋書を教える
- 4月17日: ボードウィンとウイリスについて記載
- 4月25日: 大納言様京へ途中尾州へ
- 閏4月8日: 天皇、義宜、同僚奥医師帰京
- 閏4月20日: 大雨
- 7月16日: 外国人との交流
- 8月2日: 突然「帰(ki)後断然決意致死(TiSi)楽餘年」なる記述
- 8月3日: 圭介京出立、6日帰名

## 圭介の洋学志向(1)

- 伊藤圭介日記を中心に圭介の名古屋における医学発展への貢献過程を政治的背景との関係で分析した。圭介が生きた幕末期の蘭学は漢方と対立しながらも発展してゆくエネルギーをもっていたし、時代がそうさせていた。蘭学は長崎出島を通して全国に広がって行くが、圭介および名古屋の医学が大きく発展する契機となったのは文政9年(1826)2月伊藤圭介、水谷豊文、大河内存真が宮の熱田宿でシーボルトに会見したことであろう。この後圭介はシーボルトに師事し、私費で『泰西本草名疏』を刊行(1829)、これによって草木についての科学的分類法を紹介し、それまでに日本になかった科学的思考法を導入した。その後、尾張藩重臣上田仲敏とともに尾張における洋学の発展・普及に尽力した
- 文久元年(1861)洋学についての実力が認められ、江戸・蕃書調所への出役が命じられる。この出役は外国からの書物、情報、知識を獲得するのに絶好のチャンスとなったが、文久3年(1863)12月突然帰名することとなった。嘉永・安政年間(1848-1860)尾張名古屋における洋学の発展期であったが、文久2年頃から国学派、あるいは金鉄党といわれる勢力が強くなり、文久3年5月4日に上田仲敏が病死したあとは洋学館を自宅に移し、在野における洋学普及を余儀なくされた。

## 圭介の洋学志向(2)

- その後慶応4年(1868)1月20日尾張藩にとって最も大きな政治的出来事である佐幕派一掃の青松葉事件が起きた。圭介は翌日何事もなかったかのように京警護隊の医官として出張し、動乱の京で粛々と医師の役目を果たす。政治向きのことは一医官としては関係ないといえればそれまでであるが、この事件でどちらかといえば洋学推進派の重臣達が肅清され、かつまたその親類縁者筋もかなりの影響を受けたと言うから、**洋学推進派の人物をつなぐの深い圭介にとっても安穩な日々ではなかったの**かもしれない。
- 8月2日突然「帰(ki)後断然決意致死(TiSi)楽餘年」なる記述をもって尾張藩医官を辞することとなる。この過程は全く明らかでないし、圭介の日記にも理由は述べられていないが(「療熟考之事」との記載があるので、療養が目的であったかもしれないがこれは表向きのことと考える)、洋学に理解を示していた尾張藩重臣達の零落が影響したように思われる。



## 明治2年正月15日〔見聞雑割〕

- 執政
  - 志水甲斐、**間宮外記**、生駒頼母、**田宮如雲**
- 刑法知事
  - 石河佐渡
- 軍務知事
  - **千賀興八郎**
- 神祇知事
  - 渡邊対馬
- 参政
  - **丹羽淳太郎**、**小笠原三郎右衛門**、**佐枝新十郎**、**中西眞之助**、五味織江、荒川甚作、中村修之進、大津武五郎、吉田猿松
- 神祇副知事 (河村縫殿)、 家知事 (**小瀬新太郎**)
- 三等官家知事 (高野信次郎) 会計副知事 (内藤喜左衛門)
- 軍務副知事
  - 高木作十郎
- 軍督
  - 五味織江、**中西眞之助**、津田帯刀、下條数馬、山村多門、高木作十郎、横井兵吉、津田九郎次郎、**長野七郎左衛門**、**水野内蔵**、桜井内記、井野口久之丞、馬場三十郎、天野藤四郎、富永二蔵、山村靱負
- 刑法副知事 (都筑九郎右衛門)

## 近世から現代への流れの中で圭介の残したものの

